

「立葵」265号への tweet です。

- ・中学校とは違って、問いかける問題がレベルアップされてると思いました。
- ・先生の一つ一つの話が深くて楽しかった
- ・今まで勝手に思いこんでいることが多いと思ったので、テレビとかで見るだけでなく自分で色々と調べていきたいと思った!!
- ・みんなの意見をきいたりして、ああ、そうだなって思うこともいっぱいあったし、自分の思い込みしてた所も実は違ったりとかして意外だったし、自分の意見をだれかに言えて良かったです。

授業開始早々の先週、1年生の「授業のふりかえり」で出された生徒の声を「立葵」で読み、これぞ「学びの概念砕き」の一步、とても大切な一步だと思い感動しました。

「人は、いきなり考え始めるものではない。知らないということに驚いて、それで知ろうと考え始めるのだから、考えさせるためには驚かせるしかないのだ。」

(池田晶子『考える日々Ⅱ』 毎日新聞社)

「立葵」265号の末尾に引用された池田氏の言葉、ソクラテスの「無知の知」やレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」ともつながる、学びの哲学の基本原則ですね。中学校までの「勉強」で様々な固定観念、個々の教科に関する知識だけでなく、教科に対する苦手意識や、学ぶこと自体に対する苦手意識、あきらめの気持ちなどの固定観念をどう揺さぶるのが1年生の初期指導には欠かせません。

<私の高校1年生の思い出>

公立受験に「失敗」して名古屋学院高校に失意と共に入学した私は各教科の最初の授業は驚きの連続でした。

・「数学」故諏訪俊夫先生の代数の授業。豊臣秀吉が曾呂利新左衛門の功績に報いるため、何でも欲しいものをあげようと言った時、新左衛門は「1日目は米1粒、2日目は2粒、3日目は4粒、次の日は8粒・・・と前の日の2倍の米粒を次の日にというようにして51日間だけください。」と言った。秀吉はたったそれだけかというので家来に運ばせたところとんでもない石高になった、という見たことがない公式（等比数列の和の公式？）でいきなり計算を始め結論として現在の日本の米の総生産量を超える米を手になることになる、秀吉がこの公式を知っていれば最初から許可しなかっただろうし、新左衛門はその知識があったから要求できたと結びました。数学が歴史や自分達の生活につながっているのだというのは新鮮でした。中学校時代、数学はそこそこにできてはいたけれど、興味を持って「好き」になれたのは諏訪先生の授業からでした。

・「世界史」浅野先生の授業。第1時間目に「歴史には二つの学び方がある。一つは古代から順に時代を追って現代までに至る方法。もう一つは、ある問題に沿ってその起源を歴史を遡って学ぶ方法。後者の方が現実的だけれど、様々な制約があってこの授業は前者で進めざるをえない。」という説明がありました。中学校までの歴史の授業は前者だったので、それが当たり前と思っていた私には、研究方法の説明が新鮮でした。

この他にも熊谷昭吾先生の、「度肝を抜かれる」日本史の授業など、中学までとは違った新鮮な授業に失意は消え去り、「この学校に入って良かった」と思えるようになりました。黎明の1年生がこうした思いを持っていることを知って嬉しくなりました。